

『つくし舟物語評』

服 部 仁

解 説

村田春海が書き残した『つくし舟』に、春海の弟子高田与清が旁註を付したものが、文化十一年二月刊の『竺志船物語旁註』一卷二冊である。その『竺志船物語旁註』を批評したものが、伴直方の文政六年九月の奥書を有する『つくし舟物語評』一卷一冊（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）である。

『つくし舟物語評』は、奥書によれば、文政六年に伴直方が「蘗園」という人の所持していた本を筆写したものである。よって本書は伴直方一人の筆跡であるため、本書の成立に幾人の手が加わっているかを明確にはしたがたいが、本文の書きぶりから伴直方ほか数名の評が混在していることがわかる。たとえば、朱書きの前書に「こゝにかよふ人のつくし舟物かたりといふふみをもてきてよしあしのきたをこふなり（中略）いてそのかたへをいはん」とある。「いはん」としている人が何人であるかということは不明だが、『つくし舟物語評』の祖本を記した人物であると思われる。また七ウの首書に「光枝按」とあることにより、恐らく江戸の国学者大村光枝であろうと思われる。

人物も評を加えていることが判明する。さらに奥書に出てくる「藝園」という人物の考えも書き足されていよう。その上、「まかれるをたゞして　なほきに過たりとかやいへるたくひもいとおほかめれは　いとまあるをりをえてこそ　猶かうかへたゞすへけれ」と奥書に記した伴直方自身の意見も当然あろう。右の人物のうち、江戸の国学者である伴直方・大村光枝以外は、いかなる人物であるのかを明らかにしえない。あるいは、このなかに同一人物が存しているかもしれない。

ただし、先に引用した奥書に「猶かうかへたゞすへけれ」と「猶」とあることから、一応、現存の『つくし舟物語評』の内容は伴直方の認め得るものであったと推測できよう。

すなわちこの『つくし舟物語評』は、国学者が書いた物語についての国学者の批判であり、近世小説批評の流れからみてたいそう興味深いものである。このために、本稿において『つくし舟物語評』を翻刻する。本書と『竺志船物語旁註』に關していろいろ検討もしてみたいが、紙幅の都合により今回は翻刻のみに留め、別稿を期したい。

なお本書においては、批評対象として引用してある文章が、刊本の『竺志船物語旁註』と異なっているものが少なからずある。よって本書の批評対象は、『つくし船』の稿本であろうかとも疑ってみた。しかし『つくし舟物語評』の前書の内容を見えるに、刊本の序とか凡例に対する批難があるので、少なくとも祖本『つくし舟物語評』の筆者は、批判する対象を刊本としていたことがわかる。つまりそうした相違は、書き写した際の錯誤によるものであろう。『竺志船物語旁註』については、『つくし船』(『竺志船物語旁註』)、『同朋大学論叢』第五十一号所載)において述べたので参考されたい。

本書の書誌は以下のとおりである。写本一巻一冊。袋綴。本文楮紙。若干の改装がある。大きさ…縦二三・五糎、横一六・八糎。表紙…納戸鼠色の地に柿渋の横刷毛目模様。題簽…表紙左肩に無郭の原題簽。外題内題共…「つくし舟物語評」。印記…一オのノド下方に「伴氏家印」（縦二・七糎、横〇・九糎）の朱印、一オと二オのノド下方に「倉持氏印」（縦三・三糎、横一・二糎）の緑印（千草鼠色）。丁数…一七丁。字高…一八・五糎。奥書…十七ウに「こは藝園ぬしの本もてうつしぬまかれるを／たゝしてなほきに過たりとかやいへるたくひも／いとおほかめれはいとまあるをりをえてこそかうかへ／たゝすへけれ／文政六とせ九月十八日　伴直方」とある。

翻刻にあたっては左の如くにした。

一、漢字は、字体を当用のものに統一した。

二、仮名は特に片仮名の意識をもって記していると考えられるもの以外は、すべて平仮名とした。

三、濁点や踊字の表記は原文どおりとした。

四、見せ消ちなどの訂正箇所は、訂正後のものを記した。

五、首書は該当箇所に入し、三段下げとした。

六、原文には句読点等が一切ないので、読み易いように適宜字間をあけた。

この翻刻に際して、大谷篤藏氏、石川了氏、松田成穂氏にいろいろと御教示いただき、御世話いただいた。記して感謝申し上げます。また所蔵本の翻刻を許可して下さいた東北大学附属図書館に対しても、厚く御礼申し上げます。

つくし舟物語評

・^(朱)このつくし舟ものかたりは 人の国の書に^(朱)酖世恒言といへるあり その三十六卷に蔡瑞虹忍辱報仇とある文を
この国のことのやうにかいしるしたるものなり その文によりてみつへし

・^(朱)西都に対して東都といふこと 字音にていはくしからんか 都は都会の都なれば也 都を訓してひなのみやこと
いふ時は みや所の義にて その宮は至尊及びみこたちの宮室の地をさし奉るものにて 以下にはいひかたし 音
と訓とことわりかはる事をしらすや

・^(朱)これのみ国ふみはすへて人の国の文にまねひて^{云々} 老氏莊周にもとつきけん^{云々} これらはかたくななるおしあ
て事といふへし そはよりたるもあらんよらさるもあらん かれはかれこれはこれ也 もししからはうたも^(彼ノ誤カ)伝に
よりたるといはんや しからず 人の国のうたのわたらぬさきより これのみ国のうたある事をしらすや これ
らはみな かれをさきにしこれを後にするものにて これのみ国をおとりたるものと思ふからさえつりにて み
国を八一才[〽]おとしむるものにあらすや

・^(朱)ある人^{越後人}某^{越後人}このふみを見ていふ 此文のやう 優にも艶にもなたらかにもあはれにも書たりと見ゆる所ひと所も
なし すへては 春の始にもてあそふ戯の物かたりさうしのつくりさま也けり それにことくしう序跋など書
し人は 物にくるひしやといへり こは少しくちさかなきに似たれとも しか思はるゝ所のなきにしもあらざる
也

(コ)殿朱
こゝにかよふ人の つくし舟物かたりといふふみをもてきて よしあしのさをこふなり そはいかゝはいはん
いははかれにわろし いはねはこれによからず さはれ いはねは爰にかよふ人のかひなからんか いてそのか
たへをいはん

つくし舟物語評

△一ウ▽

(朱)
・氏は藤原にて 大井の三位といふ人いまそかりけり上巻一オ
初行

爰にまつ大井の三位とかけること いかゝあらん こはかならず 大井の帥なる人いまそかりけりといはては
かなはず むかしもの語には おほく其官をもていふ事 常のことなり。すみよし物語には むかし中納言に
て左衛門督かけたる人おはしけり云々 なとゝこそかけれ 位をもていへるはあるまじう△二オ▽こそおほゆれ
もし位をもていはんには 散三位の人の外に官なきをはさもいひつへし たとへは散正二位とかくは 官卑く
して正二位に叙する人をいふよし その人官ありといふとも 公卿の官にあたらざるをは 散正二位とかくな
ともておもふに 爰にはかならず官もてかくへきことわりなりかし この大井の三位殿は 兵衛督にて宰相に
さへおはすれはとあれは しひて記者の念人となりていはんには 兵衛督も宰相もともに相当従四位下なれば
其人の高位を先あけて 爰に大井の三位と書たりともいふへけれと この△二ウ▽三位殿は 大宰帥になり給
へれば大宰帥相当
従三位なり 位をもてかくへきにあらす 大井の帥なる人いまそかりけりといはてはかなはず。(朱)

(コノ首書全文朱)

。あるはまた 大井の三位といふ人帥の任玉はりたるありけりなとかくへし 官は玉りたれと その事行

ふにおよはて 路次にてほろひたまへればなり 但し人の国の事によりたれば かゝる例にはかゝはらず

と△二ウ▽いはんや しからず 事は人の国によりたれと ふみはこれのみ国のふみ也 そむきてやあらん

(朱)

・こゝろにもあらぬよしなしことを のたまひいてけり

(ウノ語)
四行

此こゝろにもあらぬよしなしことゝいへるもいかゝ 此酒にゑひ給ひてのよしなしことなれば 心にもあら

ぬよしなしことにはあめれと かくいひては自のことくなれば 外よりいへるにはならず おのれいはんには

御こゝろにあるへくもあらぬよしなしことをさへのだまへりとあらは よく聞えんか つれ／＼草にいへる

△三才▽心にもあらぬよしなしことをそこはかとなくかきつくればとあるは 自らのうへを自いふにて よく

かなへり 文末に のたまひいてけりもいかゝ のたまへりなと他の辞にいはては

(傍線朱)

(マ)

・さばかりかしこうおはしなから 吾あやまちともおほさて あらためたまふへき御心もなきそうたてき

(ウノ語)
一丁

此文いかゝ 此三位殿身のさいかしこうよろつにおくれたるかなうものし給ふなとゝ はしめにほめたてま

つりて こゝにさめたまひて後 しか／＼まさなき△三ウ▽御ふるまひなりけるよと聞え知る人もあれと

吾あやまちともおほさて あらため給ふへき御心もなきそうたてきといひては 此人はもとよりあしけ人にて

ほめまるらすへき人かは こは酒をもちひ給ひてはまさなき御ふるまひあるよし聞え知る人のあるに その

よし聞給ひておとろき給へれと 又酒をのみ給ふ時は そむすれ給ひてうたてきことともゝおほくおはする

よしにいはては よき人にはあらしかし

・殿上人 うとましきことのかたらひくさにしつゝ 酒おにとさへつけていひはやしぬ 二オ 一行 △四オ▽

この条もことたかひて聞ゆ いかになれは 前条にいへる如く 此三位殿をはめそしる辞の混したれば それにひかれて この意 発端の文までかゝる故に聞えす成ぬ

・殿上淵醉にいたくしひられて 例のうつし心もなくゑひしれ給ひて ありとある上達部のかうふり打おとし きのしり引なくなりなとし給ひてければ 云々 二オ 六行

此事尤うたかはし 殿上淵醉は貫主 蔵人頭をいふ の人を上首として勸杯する事なるを 公卿におはす人は この盃酌にあつからざるを此三位殿 いかにものしてか△四ウ▽いかにものしてか此洵醉にしひられて さまてのまさなき事やものし給ひけん いともいふかしきことになむ

・中右記 寛治八年正月三日乙亥 今夜及深更両貫首以下著殿上淵醉事朗詠今様之後已及散楽三献一臈左衛門尉永実饗応無極施種々遊間及夜半感歎之至誠勝前々

・同記 永久六年正月三日丙戌 後聞乗燭之後殿上淵醉頭中将頭弁以下殿上人廿四人参集三献 （マ） 一臈資光二臈清能共饗応云々 △五オ▽

・明月記 建久四年正月四日 一昨日殿上淵醉頭中将 蔵人頭 実完朝臣經通朝臣公氏朝臣国通朝臣光親兼定許参人甚無人云云

・吉統記 文永五年正月三日 有殿上淵醉頭中将奉行也 予著 下襲黒半臂有出御於上戸被御覽両貫首著座 奥頭中将 端頭弁 次応召郭曲之仁公明朝臣長顕信基等朝臣著座次五位職事先朝 予著 之極臈淳範不候小板敷横敷自余蔵人候小板敷三献

之後 朗詠万歳樂等如常

・^(朱)康富記 享徳四年正月二日戊申 殿上淵醉也頭中将雅行△五ウ▽朝臣職事藏人右中弁経茂藏人左少弁益光六位恭

仲以量通任鄂曲源中将経家朝一人参之^{云五}

・^(朱)二水記 大永二年正月三日 今夜殿上淵醉也為見物著直垂参番衆所^{外様}戊終刻藏人頭中将重親朝臣入上戸著奥座次

右頭中将季国朝臣著端座此時出御^{見圖}次女房候此間殿上人等群集番衆所^{旧下侍云々當世以此所為番衆所}出御了進著奥座次資能朝臣

^{第一人外}進著奥座^{央端相}次資遠朝臣^端頼繼^端尹豊^與兼秀^端等次第著座次源諸仲橘以緒藤原氏直等著横敷次

氏直起座入神仙門著小板敷次以緒諸仲同著也次一献其△六才▽儀藤原氏直於小板敷取盃^{主殿司取}入東一間至台盤上^(ム)

辺跪貫首気色了受酒飲之弃凝濁更受酒献貫首貫首取盃^{小字}之間取継^{主殿司}次貫首気色于傍飲之弃凝濁更受酒此時

居盤伝盃^{從台盤}頭中将取之気色于基親朝臣飲之弃凝濁受酒於台伝之^{此間藏人退主殿司鈍子歟}基親朝臣取之飲畢次第巡流最末之人座

下留盃次立著於饗^{兼居之貫首著之}次二献橘以緒勸盃如前

△六ウ▽

・^元同四月停藏人頭^云あれと こは此ものかたりよりはるか後の例なれはとらす そかに 此三位殿は兵衛督かけておはしぬれ

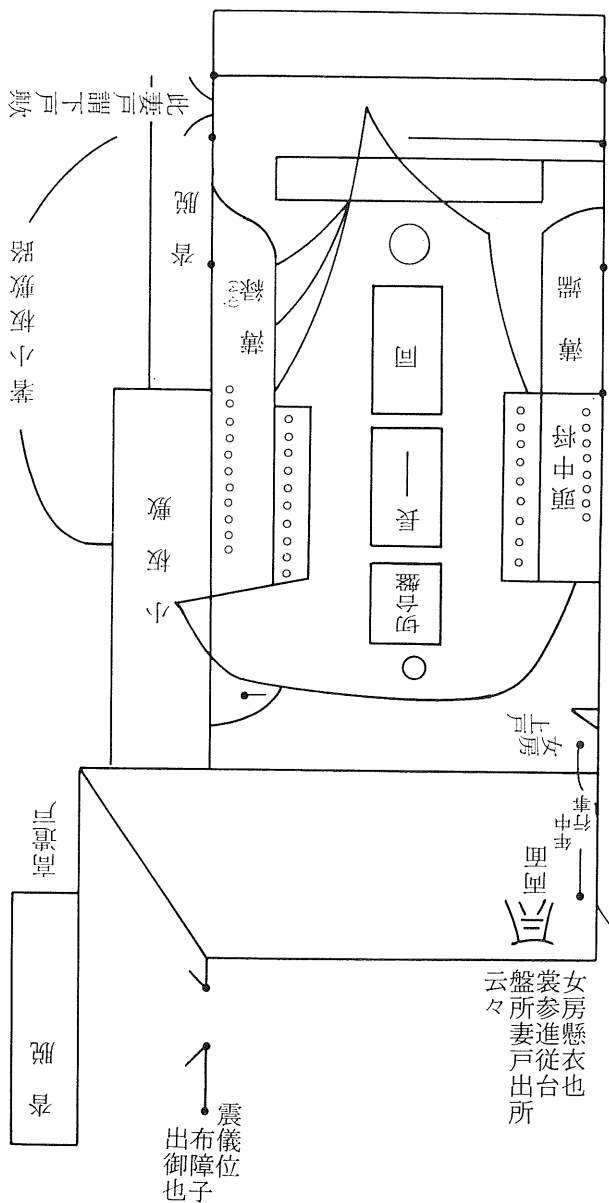
は ^{いかゝ}あらん 兵衛督にて藏人頭かねたるよしもみえねは ^{かたゝ}とられす (次頁図)

此外・永昌記・玉海・玉藻・伏見院御記等いつも貫首を上首として淵酔はある事なるを 此三位殿のしわざこそ かへす

くもあやしけれ ある人間 中納言にて藏人頭をかけたるよもあれば 此三位殿も藏人頭かねたる人もしるへからすとし

からす そはいかになれは 東三条入道^{兼家公}安和元年正月廿三日叙三位^{別勅藏人頭如元}同年二月七日任中納言不経参議^{中將藏人頭}

△七才▽



(朱)
・北のかたはわかうとほりにて やことなきすちにおはすれと いかなるすくせにかありけむ おなしさまに酒を
しもふかくこのみたまひけり
(子ノ膳)
三十
五
行
オ

やことなきすちにおはすれとゝいひては 此わかとほりのすちには酒を好む人はなきを いかなるすくせにかありけん 此北のかたは三位殿とおなしく酒を好み給ふと聞ゆ こはわかとほりにてやことなきすちにおはしけりといひて さていかなるすくせにか おなしさまに酒をこのみ給ふよしにいはては あしからむ

(コノ首書全文朱)
やことなき

光枝按 なきは無の義にはあらし こは ひさうなき はしたなき などのなきとおなしくて たすけそはるゝ辞也かし やことは いやことの約りにて 則礼異の義なるへし いやまひことなるは 高位をさすものならんかし やんのむは 語勢よりそはるゝ入声ならずや 此辞 やことなしといひし例ありや

わかうとほりと書たるも いかゝあらん 源氏物語には八七ウゝわかとほりとかけり 王家統といへることなりとは はやくより聞ゆれと 契沖阿闍梨の一説に 若王子とほりといへる説もみゆれば 正しきかうかへのいてこむまでは おのれは わかとほりにしたかひをるへくそ おもはる

(コノ首書全文朱)
王家統 統の和らきならずや

此ひめ君かたちよにすくてあかぬ所なし(朱) 三ウ。

(コノ首書全文朱)
。あかぬ所なしは たらはぬ所なし也 あかぬはたらぬ也 あくまでといふ事は たりみちたる也

(コノ首書全文朱)
おかし 日本紀竟宴のうたに おむかしとあるは おもむかしの約りなるへし そのおむかしか約りて

おかしとはなれる也 おのかなさたかなり をかしは 字鏡に可笑とある 字義あきらかなり かけろふ日記は 婦人のうつゝなき日記也 いにしへを推にたらず

『つくし舟物語評』

さるは(つくし歌)
四行十ッ

此さるはのことはをらす 是はかくておくへし^朱

・ひしりとは むへもいひけり五丁ウ
二行長歌

諾の仮名 うへなり むへとかけるも ふるくみゆれと うの八八オVかたよろしからむ

・むすほゝる おもひもとけぬ五丁ウ
八行長歌

むすほゝるおもひもとけぬといひては 語格たかへり こゝは むすほれしおもひもとけぬと 過去のこと
いはてはかなはず むすほゝるは いまむすほゝれ行をいふ

ふたかりし むねもはるけぬ五丁ウ
九行長歌 是はかくてあらん^朱

ふたかりし むねもひらけぬ とあるかた よからんか

・かくはかり ^(朱)いともたふとし ひしりとも ひしりといひて あふかさらめや六丁オ
七行長歌

こゝに いともたふとしひしりともひしりといひてあふか八八ウVさらめやと計いひては ことをなさす
はいかにとなれは はしめに これをしも ともしなせば 花をめて 月をとふにも あはれさの そはる
のみかは云々 霜こほり あられみたるゝ 冬のよも 寒さわすれつ かくはかり いともとふとし といふ
までは 上につゝきて酒のとくをはめいへることにて 談落(脱落ノ意カ)なり さて爰にて たゝひしりともひしりといひ
てあふかさらめやと計いひては 聞えず こゝは必 此きよみきをひしりともひしりといひてあふかさらめや
と ふたゝひことをおこして 更に酒のとくをたゝへていはては八九オV一首の歌とゝのはす

・かくはかり (朱) いたもたふとし 前文のうち

こも はしめに酒のとくをかすくならへいひきて たかくはかりとのみいひては ことたらはす たは
ての 霜こほり あられみたるゝ 冬のよの 寒さわすれつ といへるひとつにのみかゝり はしめまてはお
よほさすやあらん よしやこのまゝにて聞ゆるにもせよ 何となくことたらぬやうにおもはるゝは おのかひ
か耳にや

・この君のよにうつもれてのみおはするを (朱) いとほしう八九ウおほしなきて ことにふれてつねに聞え給ふを
りもあれと 七丁オ 一行

こゝに常にといへるは いかなる事にや ことにふれてといひ 下にをりもあれとなきへいひなから 常に
とありては 何のことゝも聞えず いとほしうおほしなきてつねにたのめ聞え給ふとか 又は いとほしう
おほしなきてことにふれつゝたのめ聞え給ふをりもあれといはては いかたのめつることか わきかた
し

是はなまかたよし(朱)
(この文字かりそめにものにたとへていはゝ

・いとはしうおほしなきてことにふれて 〽・つねに

・今朝は雪故

・別て大暑にて

八十オ

・たのめ聞え給ふをりもあれと

・寒き難凌候

かうやうのにいひたるにひとし

つくしの帥かけたれは 七丁オ 八行

『つくし舟物語評』

太宰帥をつくしのそちといへること　いまたみあたらず　筑紫二島のことをすへしらするよしは　令条にくはしくのせられて侍るうへは　つくしの帥といふとも　ことはたかふへくもあらねと　いまたさいへること見あたらねは　こゝにおとろかしおくなり　つくしの帥とかゝんより　太宰帥とかゝは何のあやまちはあらん　令義解官位令又和名鈔等に　オホミコトモチノツカサといへり　つくしの帥といへることは　をさゝあるまじうこそ八十ウ／＼おほゆれ　されとはおのか管見のいたらざるにもあるへし　可尋事になん

追而おもふに　大宰の帥をつくしの帥なといふも　あしきにはあらざるへし　物語などのつねとして　ことをおほよそにはめかしかけるは常のことなれば　ことつくしていふ時はことはたゞしく聞ゆれとに　ほひなし　例はなくともかくてもあらん

たひ／＼こしらへ聞え給ふ 七丁ウ
三行

(コノ評全文集)
是はいひおはせねと
きこえぬにもあらし

こゝは　常に聞えたまふことか　ことにふれてたのめ聞え給ふをりのことか　はしめの文　混したるにひかれて　わかちかたし

女の身にてかゝることのかたはしにてもまねひいてんは　かたはらいたきわさに侍れと 九丁オ
五行

(コノ評全文集)
是は、かくはふきても
しからんか

かゝる事のかたはしといへるかゝるは　何事をさしていへるにや　記者のこゝろには　いさめのもののかたはしといふこゝろなるへけれども　さは聞えず　外いさめのもの／＼たとへを先いひて　しかして後にかゝることのかたはしにてもまねひいてんはなといはては　何のかたはしやらん聞えず　ことに下にまねひいてんときへあれば　いよ／＼このことくにては聞えず

まかりまをしにとて 右のおとゝのもとへまゐり給ふ^{十六}

この事いふかし まかりまうしは必宮中にてある事なり かるき人にもあらは 右の大臣の御許へまゐりてま
かりまうしすることもある歟^{本ノマ} まかり申は 私のことにあらずして公事なるよし さたありて ことに勅語さ

へ八十一ウVあることにて おもきことなり そのよしは江次第二十に出

おとゝとし比の本意かなへりとてよろこひ給ひて よへはこゝろみにしひたりしか ゑひて後もうたてあるさま
にもあらぬを 酒鬼とかいひて 世の人のあさまじうとりなすこそ 物いひさかなきわさなれ むかしはさもこ
そうたてありつらめ 今はあらため給ぬれば われこゝろやすしとその事^{マコ}たまひける^{十一ウ} <sup>是は語路錯雑なれと
かゝるてもあるへし</sup>

此条聞えす いかにとなれば こゝろみにしひたりしか ゑひての後もうたてあるさまにもあらぬを 酒鬼

八十二オVとかいひて よの人のあさまじうとりなすこそ ものいひさかなきわさなれといひては 文つゝく
故にいまそしることになれり 酒おにといひのゝしりしは はしめのことなり さて下に 昔はさもこそうた
てありつらめなとありては いやゝ混して はしめにいへるを 今朝の雪故別て大暑なといはんかことし

あら汐にこゝろゆるすなふねにまかちありとも何たのむへき^{十三ウ}

何たのむへきとありては自たのむ也 しかるに はしめはあら汐に心ゆるすなと下知のことはにいひては八十

二ウVもと未たかへる歟 たのまれやすうといはては よく聞えたるにはあらしかし <sup>是は評全文集
はわかのまぬをいひて
かれにしめし玉ふ也</sup>

四とせ五とせ^{十四オ}
八行

五とせ六とせといはまほし 太宰帥は 年限五年六年なるよしのさたあればなり

・此月はこゝにやすらひたまひて御心しつかにくたり給はめ十五丁オ

こゝもたかへり 爰にやすらひたまひて 御心しつかに（是はなきよし朱）こそくたり給へといはは よくかなふへからん こ

（朱）

そのむすひは 必 れ め などゝのみおもへるか たまへと△十三才▽いはゝ こともなくあらんを むす
へる故にことたかひて聞ゆ めの言は もとはムエのつゝまりよりなれるかおほし さてムエのこゝろもてみ
んには いよゝたかひて聞ゆ

（朱）

・はれまゝちつけたまひて なたゝる浦の月をも見たまはてやは過させ給はむとて 日々に何くれと 海山のもの
とりつとへて 御酒すゝめまゐらす十五丁オ

爰も例の混したり こゝにては過させ給ひてんなどいはいかゝ すへて此記者 自他の分ちをしらす 此
文のさまをさにあらはすをみて知へし

他をさす○

△此月は爰にやすらひたまひて御心しつかにくたり給へはめ 晴間まちつけ給ひて名△たゝる浦のをもみたまはてやは過さ（ヤ）

・自

せ給 はんとて 日々に何くれと海山の△十三才▽ものとりつとへて御酒すゝめまゐらす

△自

○他をさす

雨やうゝはれまあれは 此ひまにこそ御舟とく出させ給はめ十六丁ウ

（後補朱）

此たまはめも はしめにいへることたかへり（この評全文朱）是はめを教令の言とすれは
きこえぬにはあらず よくはなし

・あはち島はたゝてにとるかやうにて二十オ

このとるかやうといふもいかゝ てにもとられんやうにてなといはてはきこえす 源氏あかしの巻に いつか

たとも行方なきこゝちして たゝめのまへにみやるゝはあはち鳥也けりなとありて 近く見やるゝさまを
いはんには かくてこそ聞ゆへけれ

君は磯まに馬とゝめて せんしやう引わたし八十四オVかりのおまししつらひて居給ふ二十オ
九行（朱）

。是は（コノ首書全文朱） うまとゝめての下一句をはふきてつゝけたるにて きこえぬにもあらず 髣髴とかくは 和文の

ならひ也

此条も聞えず こゝに馬とゝめてといひさして おまししつらひて居給ふと計いひては 馬にてひかへ居給ふ
ことか おましにゐ給ふことか かきさし文にて聞えず 源氏須摩（ママ）の巻に 源氏君の馬にて出給ふこゝろはえ
にてかけれと 文ふつゝかにして聞えずなりぬ かの源氏をよくみておもひわきまふへし

・（朱） 今宵しも浦わの月もこゝろして光を浪にみかくとを見る二十二オ
四行

こはみかくかと思ゆといはてはあしゝ 此うた 上より八十四ウVみかくとそまては 月のうへをおもひやり
て月のこゝろにいひくしてみみるとあるのみ 歌人の自の句なり こゝは残らす月のうへにのみいひて みか
くかと思ゆといはてはあしからむ

沖つふねとるやまかちの数さへもさやかにみゆる秋のよの月二十二オ
八行 （コノ評全文朱）
おきつ舟にの心なるへし
うたはよからず

沖つふねとるやまかちのとありては 舟かかちをとるやうに聞ゆ こは 舟人のとるやまかちのといはては聞
えかたからん

もしはやくけふりもたてすなりゆくは浦わのあまも八十五オV月やめつらん二十二ウ
一行

もしほやくけふりもたてすなり行はと計いひては しほはやきながら そのくゆるけふり計をものにさへてた
てすなりゆくやうに聞ゆ こゝは けふりもたゝすなりゆくはといはんかたよろしからん

(二ノ評全文集)
けふりもたてすとして 則 塩やかぬなるへし

・(朱) けに海山ののそみも きふにけふはかはりもて行てこそ 心もなくなくさみ (マ) おのつからまきるへきふしもあ

れ 明くれたゝおなしところなれば 君は御心くし給ひて 琴と歌とはとりもいてたまはす たゝ今ひとつの友
をかたらひ人とそなし給ふ (二十七オ) 八十五ウ

こゝのこそ詞 むすひのことはみえず うへいかにし給はん (三十オ)

こん世には鳥にむしにもとのたまひたりしをそれにはあらて 今のよなからみなそこのいろくつとこそ成給ひけ
れ (三十二ウ)

千引 三位殿を沖の方へとほくなけやれば こほとなりて 御すかた見えさるよし さて愛にてそのの鱗とな
り給ふよし めつらしきものにこそなり給ひにけれ よしそはいかにまれ 底ひも八十六オしらぬうへをい
へるに むかしより底のみくつとなるよしは誰もくいひつれと いろくつなれる事 かへすくもめつらし

きことになん (二ノ評全文集)
是は鳥にむしにもとありしに
対しいふ也 狂言のみ

あなあみた仏念したまへ (三十九オ)

あなの辞 こゝにはをらす

さらにおしとゝめて あなかしこ はやませ給ふまじ とさまにもかくさまにも 御心のまゝにこそつかふま
つらめ 三十三
六行

此まし といやしけ也 ふるくよりあるか 尋へし

・(朱)今は心にかゝることなし とて 几帳をおしひらきて△十六ウ▽いてきて見るに 三十九
五行

几帳をおしひらくといふは いかにする ことにや 几帳をおしやりてなといはては いかゝあらん
ちやう引はなちふたうちこほちたるものとも らうかはしくうちちらしたり 三十九
七行

帳か錠か 帳ならは下関たり

(朱)

△十七才▽

こは蕤園ぬしの本もてうつしぬ まかれるをたゝして なほきに過たりとかやいへるたくひもいとおほかれ
は いとまあるをりをえてこそ 猶かうかへたゝすへけれ

文政六とせ九月十八日

伴直方

△十七ウ▽